製塩遺跡　初の共同研究

日中の考古学者チーム

生きていくのに不可欠なものなのに、よく分からないのが塩作りの歴史だ。日中両国の考古学者が瀬戸内海の愛媛県上島町などで8月中旬、製塩遺跡について、初めて本格的な共同研究を始めた。今後は日中双方の発掘成果を比較し、実態の解明をめざす。

ともに海に近い場所にある日本の愛媛大と中国の山東大が協力して始めた。上島町の弓削島では製塩が古代から盛んで、鎌倉時代には京都・東寺の荘園が置かれて都に塩を送っていた。愛媛大は、同町各地の製塩遺跡を05年から発掘調査してきた。

愛媛大の村上恭通教授は16、17両日、方輝（ファンフイ）・山東大教授らを京都・石清水八幡宮に塩を納めた佐島に案内。鎌倉時代の「揚げ浜式」塩田と古墳時代の製塩遺構を発見した宮ノ浦（ミヤノウラ）遺跡で意見交換した。さらに弓削島では、復元された古代の製塩作業も見学。18日には松山市の愛媛大で国際シンポジウムを開き、共同研究がスタートした。

製塩遺跡は臨海部で見つかることが多く、両国とも地形の変化や開発、埋め立てで多くが関心を持たれないまま壊された。日本では岡山大教授だった故・近藤義郎氏らが約50年前から岡山、香川などで製塩遺跡の研究を進めたが、研究者は少ない。

中国では20年ほど前から、山東省・南河崖遺跡などで製塩遺跡の調査が開始され、海岸近くの地下から高濃度の塩水をくみ上げる方式だと判明した。3千年以上前の製塩遺跡・遺物も多く確認されているという。日本と同じような海水からの製塩もあった。

シンポでは王青（ワンチン）・山東大教授がそうした遺跡を詳しく紹介。方教授は「製塩遺跡研究の先進地である日本の発掘現場に感動した。中国ではほかに岩塩や塩湖からの製塩業もある。日本の研究者も招き、協力して研究を進めたい」と話した。（天野幸弘）

宮ノ浦遺跡で意見交換する日中両国の考古学者ら＝愛媛県上島町・佐島

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。